

『学校での「研究」』の研究？

広島 下末 伸正

・ 研究？

大学の卒論は量子統計力学というもので、およそ研究とは言えない代物でした。それでも、世の中に出ると実践はたくさんするだろうから、せめて大学時代には理論を勉強しておこうという見通しは間違っていないでした。会社の研究部でも、町民としての研究でも役に立ちました。またこの仕事でも、まわりの幾人もの教師があやしげな命題やら教育論にコロッとだまされるなかで、冷静に見ることができました。

色々な仕事をしてきて、不適応を起こしたのは学校だけで、今でも違和感があります。その原因の1つが、研究指定校という制度です。会社員としても町民としても研究というものにかかわってきていますから、学校での研究にどうしてもなじめないのです。

広島県の教育委員会や文部科学省が、どこそこの学校はかくかくしかじかのことについて研究しなさい、と、いわば業務命令を出しています。もし、学校現場で研究することが仕事のひとつであるなら、どの学校でも日々すべきであり、さらに、その学校の歴史や現状をしっかり踏まえた上で課題を明確にするべきです。遠くの人たちが決めることではありません。ましてや、文科省は、ゆとり教育で失敗しました。さらに新学習指導要領の改訂の趣旨にその反省が全くありませんでした。成果を出す力も、反省する力もないのです。

一方、現場である広島県の研究指定校の問題点は、3つの事実の中にあらわれています。1つ目は、ある校長から言われた言葉、「〇〇教頭を、校長にせんにやあならけんの。よろしく頼む」が如実に示しています。

2つ目は、今までさんざん目にしてきた研究紀要が、必ずと言ってよいほど、学校教育目標と仮説あるいは作業仮説から始まっていることです。それはよいとしても、その学校の歴史や地域のかかえる課題あるいは親御さんの願い、なにより子ども達の現状についてのきちんとした分析がほとんどありません。つまり校長の頭の中に描いた空想が課題になっています。ですから、どの研究紀要を読んでも、目の前の子ども達と授業で丁々発止して格闘した記録が全くなく、かわりに虚しい言葉が羅列されているだけです。

思い起こしますと、蒲刈町に勤め始めの頃は、小さな研究が毎年のように町内で自主的にされていました。小学校では必ず授業記録がとられ、それが反省会までに印刷されて全員に配られ、それをもとに研修をしていました。先輩の方々が綺羅星のように見えたものです。所属している科学教育研究協議会も同じです。私も、この25年以上、病気の時をのぞいて毎年1回以上は授業記録を取り、1人でも、読み返して反省してきました。

3つ目は、研究が失敗であった、仮説が間違っていた、という報告が皆無なことです。すばらしいことです。広島県の子ども達は、格段に伸びていることでしょう。しかし現実には違います。知人がそのような研究報告を出すと、教育委員会から書きかえるように指導されています。結果が分かっているのなら、苦労して研究する必要がありません。結局のところ苦労してつくった研究紀要も読まれることもなく戸棚にしまわれ、やがて焼却場の灰になります。自己満足の産物に他なりません。失敗を失敗として認めることが許されな

い研究になっているのは、第1の問題点とつなげて考えると、辻褃があいまず。失敗は、指導主事や校長の評価を下げるのでしょうか。

また、ほとんど予算はないし、必要な文献を広島県教育委員会から買っていただいたことは、ただの一度もありませんでした。会社では、図書室がありよく利用していました。

古代製塩技術の復元

会社を辞めて移り住んだ上蒲刈島では、古代製塩法復元の実験考古学研究がされていました。研究と言っても、大学の研究者ではなく、古代製塩土器の発見をした地元の島の住職さんを中心にした農家の女性などの会がしています。島の理科教師は私一人ですから、あれこれの質問もあり、また自然にお手伝いをすることもありました。

ホンダワラ（海藻）を汲み取った海水の中に漬け込み干す作業を繰り返しますと、海水が濃縮され、カン水ができます。最後に干したホンダワラに火をつけるとモウモウと煙を上げて燃えます。その灰もカン水の中に入れ、布で漉します。濾液を製塩土器で煮詰めることができあがりです。今では『海人の藻塩』として商品化され全国で販売されています。

住職さんが中心の研究は、結局、学会の定説をくつがえしました。この経験からも、大事なことを学びました。1つ目は、考古学の専門の研究者による2つの論文¹⁾を目にして、自然科学の素養があまりにも低いことです。熱の移動や濃度計算が分かっていないのですから、小学生の自由研究のようなものです。中学校理科の知識だけを使って、批判することができました²⁾。学会の定説をくつがえす研究に対して、砂糖に群がる蟻のようでした。その不備をつくことで論文にしようとする意図がありあと見えたのは、研究者としてなさない限りです。

選択教科というものがあり生徒が自分で勉強したい教科を選ぶことが、学力の向上につながると考えられていた頃のことです。大学の文系の研究者の学力の低さを目にして、そうはならないことが分かりました。高校では今でも早くから文系・理系というコースを選ばせるし、理科も私が高校生のころと違って物理・化学・生物・地学の全部を勉強しなくなっています。きちんとした基礎的知識を身につけないと、結局は、研究分野でも創造的な仕事ができにくいでしょう。

2つめです。勉強や研究は、学生や研究者だけのものではなく、広く人々の、国民のものとも言えます。文化的な活動と言うと、芸術とスポーツに限りがちです。島の農家の女性は、考古学の勉強や研究も文化的な活動であることを教えてくれました。

3つ目は、社会的に認められる結果を出すことです。研究とは、本来、そういうものです。研究発表にしても、広く出版されるような町史や大学の研究紀要や専門の雑誌などに掲載されて、はじめて認められます。

以上のように、世間一般に行われている研究は、内々で自己満足的にしている学校の指定された研究とはえらい違いです。月とスッポンほど違います。学校では、『研究』という言葉を使わないほうがいいのではないのでしょうか。

創造的な研究のために

問題点を言うだけでは実践的とは言えませんので とても勇気づけられた言葉を紹介しておきます。

『広中 　なによりもそういう、鈍感なところがさ、どんなばかでもねえ、15年ぐらい同じことをやってたら何か出てくるよね。ところがさ、毎月毎月何か新しいことにとびついていたらさ、いくら頭が良くても何もできないでしょ。

たとえば、学生に問題を与えてもね。その問題は1年ぐらいで解けますか、なんて聞いたりするやつがいるよね。こういうのは小賢しいやつだ。なかなか物知りで頭のいい学生にもそんなのがあるね。まあそういうやつってあんまり伸びないね。だから問題を与えられたらね、とにかく面白い、それが役に立とうと立つまいと知ったことじゃない、とにかくもうなんていうか、その問題にほれこんじゃうやつね。そういうやつの方がさ。将来ほんとうに良い仕事するね。初めからさ、手をつけない前からね、意味があるとかないとか、あんまりゴタゴタ言うのは、だめだね。というのは、良いか悪いかっていうことはさ、すぐほかの人がどう思うかということだからね』³⁾

世界的な数学者の広中さん世界的な指揮者の小澤さんは、創造的な仕事をするのに運・鈍・根が必要と言います。鈍はまわりに鈍感なことです。敏感な人は、流行に乗りやすく嫉妬深くてたいした仕事ができないと言います。根は根気のことです。

鈍いと言われ、また飲み込みの遅い私は、これを読んでとても勇気づけられました。日々勉強して、ひとつのことに時間をかける以外に道がなかったのですが、それが、一番原則的な方法だったようです。広中さんは15年続けたら何とかかなると言っています。なお、学習指導要領は10年で改訂されます。

運をつかむことについて、ノーベル賞を受賞した白川英樹さんは、次のように言います。

『好奇心旺盛で、深い認知力と洞察力を養い、準備された知性があれば、偶然に気付き、偶然をものにできるのです。』⁴⁾

1 真壁菫子『師楽式土器再考』 『神女大史学』第17号 2000

松岡宏一『古代の藻塩づくりについて』 瀬戸内海歴史民俗資料館紀要第14号 2001

2 『「師楽式土器再考」の誤謬』 2001

『松岡宏一の「古代の藻塩づくりについて」を、分析する』 2001

3 小澤征爾・広中平祐『やわらかな心をもつ』 新潮社 s59 60頁

4 白川英樹『脇道を楽しむ心があれば 幸運な失敗や偶然に出会える』 科学技術振興機構『Science Window 2009.2月号』 6頁